

小坂奇石書芸の一考察

－徳島県の収蔵作品に関する考察－その 1

A Study of Kiseki KOSAKA's Calligraphic products

－A Study of safekeeping Calligraphic Products in Tokushima Prefecture－Part 1

東 國 恵 (南光)

Kunimegu AZUMA
(Nanko)

目 次

- 1、はじめに
- 2、小坂奇石の人となり
- 3、収蔵作品一覧表
- 4、年代別作品の題材とその特徴について
 - A、30歳代の書（8点）
 - B、40歳代の書（1点のみ）
 - C、50歳代の書（10点、県郷土文化会館収蔵作品1点を入れると計11点）
 - D、60歳代の書（20点）
 - E、70歳代の書（28点）
 - F、80歳記念個展作品（22点－79歳の京都・徳島展の作品）
 - G、80歳代の書（31点－米寿個展以前の作）
 - H、米寿個展の書とその他（32点）
- 5、まとめ
- 6、おわりに
- 7、写真資料
- 8、参考文献

はじめに

徳島が生んだ小坂奇石先生は真に偉大な書道家である。徳島大学名誉教授田中双鶴先生の言によれば、空海、貫名菰翁、小坂奇石を阿波の三筆と称している。確かに菰翁に継ぐ優れた多くの作品を残している。幸い今年徳島県に寄贈するお手伝いをした関係もあり、今後中林悟竹の作品330点とともに

に県の良き文化財として県民や好事家に親しまれることを信じてやまない。今年の寄贈の奇石書芸作品130点と以前寄贈の作品24点が現在県教育委員会生涯学習課の管理で、県立図書館の書庫に収蔵され、県立書道美術館の建設を待ち望んでいる。今回の寄贈作品130点の題名、作者、作品寸法、出品展名を可能な限り明記し一覧表にまとめた。更に個々の作品の題材や書写年代等も検当を試みた。今後の奇石書芸研究と鑑賞に供すれば幸いである。続いて80歳記念個展（京都と徳島1つの作品の22点とそれより以前の作品二点。更には昭和45年日展文部大臣賞受賞作品。69歳の作品が県郷土文化会館に収蔵。これらについても時代を追って奇石書芸作品について観察してみたい。

1、小坂奇石書芸の概要

没後六年目を迎え今尚、畏敬の念が増すばかりである。奈良学芸大学の二回生から約三十余年来、身近に教えを受ける栄に浴した私が、「小坂奇石遺作展」大阪と徳島での開催。同時に「小坂奇石の生涯」の出版のお手伝いをしたことで、懐かしさと尊敬の念を込めて、先生の遺徳を振り返りつつその概要を述べてみたい。以下先生を奇石で表現。

奇石は由岐町で長男として生まれたが、書道への大志を抱いて上阪、黒木拜石に師事した。31歳のとき東方書道会第1回展に出品したが、「楼」の崩しが「棲」に見え曖昧との理由で落選。この教訓がバネとなり、書を真摯な態度で習い、漢籍の学習も本腰を入れ、梅見梅香、土田竹雨、増田半剣に師事した。その三年後から東方書道会に連続四回特選入賞。大家への船出となる。これらの作品は、大幅の二連や四連幅の大作で単体行草体ながら墨痕鮮やかに堂々として圧巻である。38歳のとき大阪ガスの秘書課に毛筆書き専属で入社。この頃から書道や漢籍の研究が本格的に進む。仕事のないときは、書論、書道史や書法芸術や論語や老荘思想等多くの漢籍を涉猟。また書道の方も書聖王羲之を中心に、行草体で晩唐の顔真卿の剛直で力量感溢れる書を礎として、宋代の米芾の明快遒勁な書や明代の王鐸の豪放磊落な書を学び、楷書では、六朝北魏における力強い重厚でガッチリした書がベースになっている。つまり正統派書道を歩んだ。また手控帳からも推察できるが、平安朝の優れた古典の臨書を始め、散らし書き等相当幅広い研究がうかがわれる。この状態が55歳の停年まで続いたことを考えれば、書は勿論、漢学的素養を培うのにうってつけの時期でもあったと考えられる。またこの間には戦争もあり、燈火管制の時も寸暇を惜しみ、ゲートルを巻いたまま練習に励まれたことも有名な話である。

次の50歳後半から60歳後半にかけては、多彩な活躍の時期に当たる。奈良学芸大学教授、高野山大学教授、徳島大学講師を歴任する傍ら、日展審査員も務める実に多忙な毎日が続く中、自身の書の研究も怠りなかった。慈雲や大燈国師等の禅僧の書に興味を持ち、線の行者と自称しながら筆法を習い尽し、しかもそれを超越し、他の追従を許さない個性的で内面性の崇高な作品を次々と発表。我々はその迫力に圧倒させられた。

奇石の作品と人柄に魅了されて集った弟子達は、第1回瑛社展を開き、月刊「書源」も創刊された。徳島でもその門下生が直心会を発足させ今も続いている。昭和46年東京で古稀個展を開催。いずれの作品も屈託なく冴えわたり、気宇雄大で弾力性に富んでいる。重厚さの中に大胆な筆致と高邁な精神

性を感じさせる作品群は観る人を驚かせ、関西に小坂ありとその存在を関東人の胸に焼きつける事となる。

次は喜寿展から80歳記念展。従来の豪快さを少しおさえた作品だが、重厚沈着さは変わらない。“書瘡で右への払いが書きづらい”と口にしたものの筆力はまだまだ衰えていない。このときの作品22点が県立図書館の書庫に収蔵されていて、今回次の項一覧表の131～152までの作品である。

宋代の書家米芾が、晋魏時代の平淡の最終目的にした如く、奇石書芸も重厚雄勁な中国の書道を窮め、心手が合一して、自然のままに天真があらわれた、平生でごく自然な筆跡へと向って行った。奇石は晩年奈良に居を移し、別号に「和郷」の印も持って、和雅の境地を意識していたようである。

そして奇石書芸の集大成は、平成元年の米寿個展である。その数100余点。「人書ともに老ゆ」のことば通り、丸味と温雅さが感じられ、変幻自在の一語に尽きる作品群であった。奇石の口から88歳にしてしかも個展作品を書き上げて“字を書くのが足った”書きまくった挙句の果ての師のことばだった。腰痛のため、以前に比べて動きは今一つだったが、奇石の書道芸術は総集編ともいべき作品の数、そしてその筆致の妙味は多くの人を魅了したことが記憶にも生々しい。

米寿個展の作品集の最初に「八十八年夢の如くうつり、臨地 磨墨尚依然。而今願うこと他事なし。字々渾身、白箋に写さん。」とある。これは、奇石の心境をうたったもので、古淡から平淡へ気宇の雄大な息づかいが韻となって伝わってくる。

奇石書芸は、中国の力強勁勁で韻のあるものから、禅僧の精神を取り沈着にして筆にとらわれず、豪快な作品の数々を発表をし続け、最後は和雅を求めて集大成されたものがある。

2、小坂奇石の人となり

青年時代偏食で病気がち。克服のため、食べ物に留意工夫。頭髮も80過ぎまで黒々していたが、一説によれば、漢方薬のセイブりを飲み続け、わかめをよく食べた為とか。

私が奈良学芸大の学生だった頃、奈良公園を同級生と一緒に散歩しながら帰ったが、奇石は姿勢がよく、歩く時にバネをきかせて速や足で歩いた。自然をこよなく愛され、蘭も何鉢か愛玩されていて、開花時にお稽古場に入ると香気が馥郁と漂っていたのを思い出す。

徳島へ毎年春と夏に帰り、徳島大学の集中講義と書道研究直心会の錬成会に来て精魂込めて指導した。徳島の自然と人をこよなく愛し、帰郷が何よりの楽しみだった。

また昭和55年79歳のとき、県文化賞を受賞、そのときの心情を詩に吐露して「此の生；八十江湖を関す、朝墨場中、只た、愚を守る。老骨、豈に懷わんや、誉賞を承くるとは、一通の朗報、我、われを忘る。」非常に謙虚で自己に厳しく、且て弟子にも厳格だった。

上の如き奇石に人間性と漢字の素養と禅僧の高い精神性が醸成され完成の域に達したのが奇石の人となりであり、奇石芸術である。

まさに「健全な身体と精神から健全な書が生まれる」ことばの通りの人であった。

3、所蔵作品一覧表

No.1

番号	作 品 名	書き出し数文字	制作年	年令	備 考	軸	額	屏風	その他	作 品 寸 法	仕上げ寸法	
1	淳化閣帖臨書	故史從事中	昭和8年頃	32頃	淳化閣帖 タテ5行	○				179×77	260×83	-30歳代
2	李白詩	昔遊三峽身	昭和9年	33		双				257×61×2	332×76×2	
3	鄭集詩	林疎多暮蟬	昭和10年	34	タテ4行	○				182×61	234×75 (写真1)	
4	蘇東坡詩	道人胸中水	昭和11年	35	東方書道会展 タテ7行	○				245×59	300×80	
5	韓愈詩	山石牽角行	昭和12年	36		○				265×67	308×80	
6	蘇東坡詩	我家江水初	昭和13年	37		四				261×63×4	321×67×4	-40歳代
7	七言古詩	昨夜誰為吳	昭和15年	39		双				195×50	250×64×2	
8	臨湯燕生字	谿山都自意	昭和15年	39		双				156×33×2	214×45.5×2	
9	孟賁詩	煙霞多放曠	昭和17年頃	41頃		○				241×55	287×61	
10	陸湘客之語	蒼海日赤城	昭和28年	52	関展			二		168×84×2	182×190(写真2)	
11	七言律詩	万竹千松遠	昭和30年	54	日展 タテ3行×2			二		170×52×2	223×120	-50歳代
12	七言二句	秋山破夢風	昭和30年頃	54頃		○				134×34	193×45.5	
13	陸湘客之語	詵理義書学	昭和31年	55	日展 タテ3行×2			二		134×53×2	172×120	
14	瀬石の詩	日似三春永	昭和33年	57	二十人展? ヨコ7字		横			35×135	46×170	
15	芭蕉-贈酒堂-	湖水の磯を	昭和33年	57		○				35×25	108×36 (写真3)	
16	寒山詩	寒嶽深更好	昭和34年	58	二十人展 タテ4行×2			二		93×70×2	172×170	
17	五言律詩	小樹開朝徑	昭和34年	58	日展 タテ3行		○			224×66	240×90	
18	寿無疆	寿無疆	昭和35年	59	二十人展 タテ3行		○			123×50	167×85 (写真4)	
19	養神保寿	養神保寿	昭和35年	59	日本書芸印 タテ4行		○			97×34	126×46	
20	陶淵明詩	望雲慙高鳥	昭和36年	60	二十人展 タテ2行×2			二		114×64×2	172×172	
21	奇石自作-題金農梅花	冬心妙筆寫	昭和36年	60	二十人展 ヨコ5字		○			41×69	70×88 (写真5)	
22	忘 機	忘 機	昭和36年	60	個展	○				54.5×34	146×36.5	
23	蘆同茶の歌の一節	一椀喉吻	昭和36年	60	個展	○				49×63.5	144.4×77.5	

No.2

番号	作 品 名	書き出し数文字	制作年	年令	備 考	軸	額	屏風	その他	作品寸法	仕上げ寸法
24	李太白詩－沐浴子－	沐芳莫彈冠	昭和38年	62	タテ4行		○			61×43	93×60
25	獨掌不浪鳴	獸掌不浪鳴	昭和38	62	関展 タテ5字		○			110×27	156×45
26	白雲無根	白雲無根	昭和39年	63	巡回展 タテ4字		横			35×139	52×173
27	陸紹珩之語	蒼海日赤城	昭和39年	63	二十人展		横			34×131	58×158
28	良寛の詩	青天寒雁鳴	昭和40年代	64		○				36×28.5	117×38.5
29	心凝形釈	心凝形釈	昭和40年	64	二十人展 タテ4字		○			136×35	163×51
30	王輅川詩	中歲頗好道	昭和41年	65		○				133×46.5	203×53
31	璚々	璚々	昭和41年	65	璞社 ヨコ2字		○			59×67	86×87
32	醉古堂釗掃之一節	黃花紅樹春	昭和42年	66		○				79×35	161×48
33	田能村竹田詩	満園竹樹畫	昭和42年	66	33人展 ヨコ5行		○			36×50	55×66
34	春山如笑	春山如笑	昭和42年	66	璞社 ヨコ3行		横			59×103	83×110
35	鑑澄潭	鑑澄潭	昭和43年	67		○				135×33.5	208×44.5
36	遺形	遺形	昭和45年	69	毎日展 タテ2字		○			67×68	85×84
37	良寛詩	富貴非我事	昭和45年	69		○				34×47	129×59
38	海月澄無影	海月澄無影	昭和45年	69	墨遊展	○				132×35	204×48
39	杜牧詩－念昔遊－	李白題詩水	昭和45年	69	墨遊展	○				68×43	137×55
40	靄然	靄然	昭和46年	70			○			65×69	86×89
41	不亦榮乎	不亦榮乎	昭和46年	70			横			31×130	46×162
42	烏啼忻然有会	烏啼忻然有	昭和46年	70		○				123×32.5	182×44
43	清虚	清虚	昭和46年	70			○			135×70	153×86 (写真6)
44	大伴家持の歌	和我屋度能	昭和49年	73	書芸院	○				57×63	147×69
45	石川丈山－山居即事－	山氣殊人世	昭和49年	73	璞社 タテ3行		○			103×63	135×50
46	七言二句	妙処欲道	昭和50年	74		双				135×67×2	204×81.5×2

-60歳代

番号	作品名	書き出し数文字	制作年	年令	備考	軸	額	屏風	その他	作品寸法	仕上げ寸法
47	陸湘客の語	傾半飄之粟	昭和50年	74			○			110×63	134×87
48	遊不帰	遊不帰	昭和50~52年	74~76	ヨコ3字		横			33×89	36×157
49	寧慙湖上梅	寧慙湖上梅	昭和51年	75	日本の書展 タテ5行		○			121×33	148×49
50	撥雲	撥雲	昭和51年	75	ヨコ2字		○			33×52	64×78
51	一聲孤鶴破寒煙	一聲孤鶴破	昭和51年	75	日展		○			131×69	172×95
52	五言絶句	鄉鷄殘夢斷	昭和52年	76			横			69×131	88×155
53	杜牧詩	千里鶯啼綠	昭和52年	76	環社 ヨコ6行		○			68×135	92×155 (写真7)
54	劉禹錫 - 陋室銘	山不在高有	昭和53年	77			○			72×46	88×63
55	奇石自作 - 苦王室隅占 -	一架図書文	昭和53年	77	扇面		○			28×66	52×94
56	鳴鳳棲清梧	鳴鳳棲清梧	昭和53年	77		○				135×35	195×45.5
57	五言二句	幽禽聲自來	昭和53年	77	西日本書壇 タテ2行		○			59×59	81×77
58	讀書得趣是神仙	讀書得趣是	昭和53年	77	関展 タテ7字		○			127×34	148×51
59	七言二句	老鶴踏翻松	昭和53年	77	日展 ヨコ4行		○			77×112	107×140
60	五言二句	彩霞籠遠嶺	昭和54年	78		対				134×34×2	197×48.5×2 (写真8)
61	銀盤盛雪	銀盤盛雪	昭和54年	78			○			35×140	48.5×169
62	王漁洋詩 - 治春絶句 -	東風花事到	昭和55年	79		○				48.5×62.5	151×77.5
63	楊萬里詩	路傍野店両	昭和55年	79		双				122×68.5×2	204×83.5×2
64	陶淵明詩	望雲慙高鳥	昭和55年	79		○				64×61.5	165×76
65	遊神	遊神	昭和55年	79			横			48×100	68×120
66	忘機	忘機	昭和55年	79		○				22×43	117×57
67	林中不賣薪	林中不賣薪	昭和55年	79		○				77×18	162×28
68	不如学	不如学	昭和56年	80						23×70	35×93
69	神爽	神爽	昭和56年	80	環社 ヨコ2字		横			65×124	90×148

-70歳代

No.4

番号	作品名	書き出し数文字	制作年	年令	備考	軸	額	屏風	その他	作品寸法	仕上げ寸法
70	澄神	澄神	昭和57年	81	読売 ヨコ3字		横			49×103	81×131
71	棲遅慰情	棲遅慰情	昭和57年	81	ヨコ2字		○			59×66	77×84
72	暢叙幽情	暢叙幽情	昭和57年	81	読社 ヨコ2行		横			70×135	90×143
73	気爽	気爽	昭和58年	82		○				43×26	124×39
74	雨順風調四海寧	雨順風調四	昭和58年	82		○				131×34.5	197×47.5
75	雲中白鶴	雲中白鶴	昭和58年	82	現・臣		○			64×67	87×89 (写真9)
76	無礙	無礙	昭和59年	83	西日本書壇		○			33×70	48×90
77	清風灑然	清風灑然	昭和59年	83	関展		○			60×64	79×83
78	魚相忘乎江湖	魚相忘乎江	昭和59年	83	ヨコ2行		○			66×64	87×85
79	醉古堂劍掃の一節	茅齋獨坐茶	昭和59年	83	読社 タテ1行×6			六		135×35×6	154×270
80	蓬蒙善射	蓬蒙善射	昭和60年	84	二十人展		○			68×69	91×92
81	寒山詩	閑遊華頂上	昭和60年	84	タテ2行×2 サンケイ100人展			二		168×46×2	172×180
82	福星開寿域	福星開寿域	昭和60年	84	タテ5字		○			129×33	158×50
83	許由洗耳	許由洗耳	昭和61年	85	祇誕会 タテ2行		○			60×52	84×52
84	持法有恒	持法有恒	昭和61年	85	読売書法 タテ2行		○			65×67	88×88 (写真10)
85	澗水湛如藍	澗水湛如藍	昭和60~61年	84~85	H2日展 タテ5行		○			135×35	153×52
86	魂乃開發	魂乃開發	昭和61~62年	85~86	読売 ヨコ4字		横			28×120	49×151
87	空海-五言二句	鸞鳳翔碧落	昭和62年	86	ヨコ4行		横			66×131	83×171
88	呦々鹿鳴	呦々鹿鳴	昭和62年	86	ミニ巨匠 ヨコ2行		○			17×22	55×43
89	和光同塵	和光同塵	昭和62年	86	読売書法 タテ2行		○			60×67	81×88
90	笑而不謔	笑而不謔	昭和63年	87			横			35×138	51×161
91	蜂房不容鵲卵	蜂房不容鵲	昭和63年	87		○				67.5×68	162×81.5
92	鶴唳數聲煙靄中	鶴唳數聲煙	昭和63年	87		○				64×66	151×80

-80歳代

No.5

番号	作 品 名	書き出し数文字	制作年	年令	備 考	軸	額	屏風	その他	作 品 寸 法	仕上げ寸法
93	衛玠云之語	珠玉在側覚	昭和63年	87		○				64×32	154×43
94	虚	虚	昭和63年	87	二十人ミニ 二字		○			33×35	53×63
95	鹿 鳴	鹿 鳴	昭和63年	87	日本の書展 ヨコ2字		○			32×59	46×74
96	鈍鳥栖蘆	鈍鳥栖蘆	昭和63	87	読売書法展 ヨコ4字		○			33×134	163×51
97	蘇東坡之閣	溪聲便是廣	昭和63年	87	日展 ヨコ5行		○			67×116	88×147
98	拳杯邀清光	拳杯邀清光	昭和63年	87	日本の書展		○			122×39	152×52
99	蘭亭序	永和九年歳	平成元年	88	米寿個展	四				165×48×4	230×65×4
100	奇石自作	今は昨非花	平成元年	88		○				42.5×21.5	126×33.5
101	奇石自作	無事清間蜀	平成元年	88		○				43×21.5	126×33.5 (写真1)
102	醉古堂鉅鼎之一節	一輪明月花	平成元年	88		○				直径34丸	146×56
103	奇石自作 - 元日即事 -	元旦屠蘇酒	平成元年	88		双				130×22×2	200.5×32.5×2
104	徳不孤必有隣	徳不孤必有	平成元年	88		○				31×34	125.5×47
105	木俣修の歌	さわがしき	平成元年	88	サンケイ100人展 写真なし	○				33×24	124×35
106	山辺赤人の歌	春野尔須美	平成元年	88	サンケイ100人展	○				27×18	124×33
107	斎藤茂吉の歌	最上川なが	平成元年	88		○				83×24	167×37
108	奇石自作二首	振策箕山路	平成元年	88				枕二		68×43×2	108×186
109	奇石自作四首	三弓白屋托塩満	平成元年	88			横			34×135	48.5×153.5
110	山辺赤人の歌	若浦尔塩満	平成元年	88		○				50×33	130×46
111	平福百穂の歌	金剛の一萬	平成元年	88		○	横			57.5×26	140×38 (写真2)
112	寒山詩	鳥語情不堪	平成元年	88		○				53×67	76×91
113	奇石自作 - 蘭亭曲水宴 -	右軍千歳迹	平成元年	88		○				127.5×33.5	197×47
114	書 魂	書 魂	平成元年	88		○				64×62	160×75.5
115	鑑澄潭	鑑澄潭	平成元年	88			横			35×140	49×161

No.6

番号	作品名	書き出し数文字	制作年	年令	備考	軸	額	屏風	その他	作品寸法	仕上げ寸法
116	日出皎	日出皎	平成元年	88		○				98.5×34.5	182×47.5
117	南山寿	南山寿	平成元年	88		○				90×32	171×45.5
118	晏如	晏如	平成元年	88		○				65×35	149×49
119	寿	寿	平成元年	88		○				67.5×67	156×82
120	劉球詩-山居-	水抱孤邸遠	平成元年	88		○				63×45.5	148×59
121	奇石自伝-遊龍田-	龍田川響消	平成元年	88		○				31.5×33.5	130×49
122	朝々日出東方	朝々日出東方	平成元年	88		○				125×34	196×47
123	奇石自伝-高尾晚帰-	高雄雨霽気	平成元年	88		○				123×34	206×47
124	識法者懼	識法者懼	平成元年	88			横			30×120	42×148.5
125	開花如錦	開花如錦	平成元年	88			横			34×131	49×162
126	奇石自作-鐵仙蓮-	鐵仙蓮独坐	平成元年	88			横			33×119	49×146.5
127	奇石稿-遊瀧江-	明媚風光興	平成元年	88		○				54×37	163×56
128	奇石自作-佐古清水寺偶占-	雨過爽嵐翠	平成元年	88	H 2 関西総合美術展出品作 H 4 現代書道20人展出品		○			88×28	113×48
129	天真爛漫	天真爛漫	平成元年	88			横			30×127	50×163
130	清姫莊-即事-	一夜來雪	平成元年	88		○				40.5×42	127×56
131	薦寿	薦寿	昭和55年	79	80歳個展		○			100×50	122×70
132	陶淵明-桃花源記-	晋太元武陵人	昭和55年	79	"			二		145.5×81.5×2	172×188
133	三日不読書語言無味	三日不読書	昭和55年	79	"		○			74×75	93×94
134	奇石詩-残春-	林園慈雨過	昭和55年	79	"	○				164×50	220×65
135	万葉歌-志貴皇子の御歌-	石漱垂水之	昭和55年	79	"		○			60×63	92×90
136	李太白-桃李園序-	夫天地万物	昭和55年	79	"			六		133×33×6	152×217(写真3)
137	笠井南邨-花前滿酌-	浮生幾值快心春	昭和55年	79	"	○				118×32.5	202×47
138	奇石詩-歲朝-	灼々初陽上	昭和55年	79	"	○				159×47	223×62

-80歳代

番号	作 品 名	書き出し数文字	制作年	年令	備 考	軸	額	屏風	その他	作品寸法	仕上げ寸法	
139	李白詩	暮從碧山下	昭和55年	79	80歳個展	○				151×56	214×71	70歳代
140	聴松濤鳥韻	聴松濤鳥韻	昭和55年	79	〃	○				126×35	198×49	
141	張若虛詩－春江花月夜－	春江湖水海連	昭和55年	79	〃				卷子	34×372	39×435	
142	蘇東坡詩－治春－	梨花淡白	昭和55年	79	〃	○				145×41	203×56	
143	白楽天詩－錢塘湖春行－	孤山寺北賈亭西	昭和55年	79	〃		横			64.5×122	86×144	
144	進藤虚籟の詩	看山還臨水	昭和55年	79	〃		○			35×45	58×67	
145	五風十雨	五風十雨	昭和55年	79	〃	○				130×34	202×49	
146	陶淵明詩－五柳先生伝－	先生不知何許	昭和55年	79	〃			二		127×54×2	152×140(写真14)	
147	奇石詩－月下聽－	皎々中天月	昭和55年	79	〃		○			56×65	83×98	
148	李太白詩－清平調－三首	雲想衣裳花想	昭和55年	79	〃	連				152×41×2	213×56	
149	李白詩－題金農梅花図－	冬心妙筆	昭和55年	79	〃		横			34×134	54×171	
150	蘇東坡詩	竹籬茅屋	昭和55年	79	〃	○				131×63	198×79	
151	奇石詩－八瀬偶占－	四山靜	昭和55年	79	〃				陶板	24.5×28.5		
152	進藤虚籟先生詩	枯樹	昭和55年	79	〃				陶板	25×28.5		
153	聴松濤	聴松濤	昭和33年	57			横			126×32.5	168×475	
154	寒山詩	寒山有皞蟲	昭和55年代	75頃			横			67×52.5	90×76	

4、年代別作品の題材と書の特徴について

A、30歳代の書（8点）

- 1、淳化閣帖の珍しい楷書臨書作品で、32歳頃の作だがまだ奇石書風は全く感じられない。一行13～4字で五行縦書き作品。
- 2、李白詩「元丹丘が巫山屏風に坐するを觀る」題の七言古詩125字を2.6×0.6mの双幅に毎行四行に草書主体で単体にまとめたものである。33歳頃の作
- 3、鄭巢詩「瀑布寺貞上人院」前者2 とほぼ同じ書風だが、やゝ筆と深さを覚える五言律詩を2.5×5.9mに行草体四行でまとめた。34歳頃の作。（写真1）
- 6、蘇東坡詩「山寺」154字七言古詩を2.6×0.6m四連幅で行草体で每三行にまとめた作品。37歳の作。
- 7、七言古詩 70字每三行大双幅。行書基調単体の作。気満は少ない。39歳の作。

以上2、3、6、7の作品は大作で、行草体単体表現、文字の締め具合も余りなく気力の横溢も少ない作品。しかしなら、筆力と行草の書法技術の水準は一定の高さを感じさせる。30代8点中の2点4、5は上記と少し異つ作品傾向である。

- 4、蘇東坡詩、七言古詩240字を七行書き行書基調。2.5×5.9m35歳の作
 - 5、韓愈詩、七言古詩140字を六行書き行書基調の作で奇石36歳で2.6×6.7mの作品である。
- 以上4、5、の作品は、一幅多行で行書体で根気よく気を持続しているところが、美事である。4は奇石風はほとんど感じられないが、5には後の奇石書風を感じさせる要素が観察できる。
- 8、臨湯燕生字。85字三行書き双幅。1:6×0.3 楷書体に纏め上げた39歳の作。各文字に後の如き造形上の開閉（空間）や線の細太は見られないが、この歳つまり30歳の終り頃既に奇石書風の片隣が読み取れる。

B、40歳代の書（寄贈分は一点のみ）

- 9、孟貫詩。40字五言律詩。41歳頃の作品で40歳代は残念ながらこの一点のみである。奇石書風は少しは感じるが、筆の開いた重厚な線は余り見られない。

C、50歳代の書（10点 郷土文化会館収蔵作品1点を入れると計11点）

この年代に奇石書風確立の基盤を作ったのではあいかわれる。書形が題材に応じて千差万別の変化を出す第一歩ではなかったか、その最初にあげられるのが、

- 10、陸湘客之語である。大画仙紙二枚、毎四行で二曲屏風に変化に富んだ筆致で躍動している。陸氏の胸懷を追わんと欲して青墨で書いた傑作である。52歳の作。扁と旁の開閉が行の流れを出すために巧みに自在に変化、運腕も実に大きい。（写真2）
- 11、七言律詩。56字每三行を二曲屏風に潤達な筆致で仕上げ、緩急、細太を巧に混えた美事な作品である。54歳日展作品で相当力の入った作である。昭和25年49歳の日展特選受賞作品に比べると、線の深さと丸味では及ばないが、気力たるやすごいものがある。（以下昭和S. 平成はH

で表す)

- 12、七言二句。半切二行堂々の作。
- 13、S31年第12回日展55歳の作。陸紹斑の語「理義の書を読み、法帖の字を学び、心を澄して静座し、益友と清談し、小酌し半醺し、花に洗ぎ竹を種え、琴を聴き鶴を遊び、春を焚き茶を煮、舟を泛べて山を観、意を変棋に寓す、他楽有りと雖も、吾は易えず」10の作品をとともに、聖人君子の生き方の理想的な題材を選んだ表現は、奇石書芸の理想とも考えられ、線質の温かさと筆力と気力は実に美事の一語に尽きる。
- 14、漱石の詩。「57歳の作。半切横毎行2～3字7行草書基調の作。第22回現代書道二十人展の作。
- 15、芭蕉－贈酒堂－仮名的な作品である。奇石手控帳などに書かれた仮名練習に近い作風である。練習成果がこの作品にも出たものと推察できる。芭蕉の田螺への細やかな愛情の前の詞はやゝ細く小さく表現し、「難波津や田螺の蓋も冬ごもり」をやゝ太く大きく漢字と仮名を巧みに配した美事な作である。S33年現代二十人展57歳。(写真3)
- 16、S34年現代書道二十人展の作。寒山語五言律詞を二曲屏風に四行と三行行書調で纏めた58歳の作。横の動きが印象的
- 17、五言律詩、S34年日展 2.2×0.6縦三行の大作。力量感溢れる作、肉太で重厚さも感じる。
- 153、「松涛を聴く」半切横三文字。松は異体文字、涛は寿を篆書体の作品 S34年二十人展出品作。58歳の作
- 18、「寿無疆」六朝風の楷書で、縦三文字聯落に書いた。字形ともユニークな作品。59歳 S.35二十人展出品作。(写真4)
- 19、「養神保寿」やゝ肉太な線質。半切たて $\frac{3}{8}$ に四字の作。
- 以上50代の作品だったが、頻る精力的作品作りをした時代で、奇石書風を築いた時代といっても過言ではない。

D、60歳代の書(20点)

- 20、陶淵明詩「望雲慙高鳥、臨水愧遊魚」藁筆か竹筆かはたまた筆が充分下りきらないまゝ書いたように線質で、筆がよく開いているが、滲みがほとんどない60歳二十人展の作。
- 21、奇石自作詩、60歳二十人展出品作品で始めて出てくる。S30年関西展(以降関展と書す)出品の作。金冬心の梅花図に題す。筆致秀勁、行草体五行七言絶句28字を巧みに纏めた佳作。(写真5)
- 22、還暦個展の作「機を忘れる」小作ながら草書体肉厚な力強い線で一気呵成に書き上げている。
- 23、盧同茶の歌の一節で、前者と同じ個展出品作の第二作かとも思われる。第一作に比して字形の締が少し甘いようである。筆先のよく利いた痛快な作。横広に九行に纏め上げた作品。
- 24、S38年現代書家三十人展の作。李白詩「沐浴子」造形的によく締った奇石独特の楷書で太さと勁さのある縦四行書きの作品。
- 25、「獸掌不浪鳴」を半切縦一行行書で一気呵成の作。62歳関展の作。
- 26、「白雲無根」半切横扁額行書作品。運腕は余り大きくない。

- 27、10に同じ語句を書いているが、この作品は二十人展出品の63歳の作品。模扁額に16行で、一行5～6字行草体で扁と旁を巧みにずらしたり、広げたり行の変化が美事に処理されて、実に暢達の筆致がうかがわれる。行草が上手に安排され変幻自在である。
- 28、良寛の詩を小品に3行行草体で濶達に纏め上げた。64歳の作。
- 29、「心凝形釈」精神を集中させる意味で、集中度の高さと気力の横溢、筆を開いて大胆に墨蹟を感じさせる。64歳二十人展の作。半切縦4字一行。
- 30、王輞川（王維）の有名な詩「中歳に頗ぶる道を好み・・・」五言律詩を三行聯落作品に仕上げ、筆は開かずさらっと書き上げた。
- 31、「璘々」S41年璞社展出品作。墨蹟の書を意識した作と思われる。
- 32、醉古堂剣掃の語の一節である。四言八句32字を行草体で30と似た調子だが、やゝ運腕大きく書き上げたもの。
- 33、多能村竹田の詩を21の金冬心の梅花図に題すと相通ずる書風で書き上げた。筆先の利いた秀勁な作品である。横広六行行書体の作。
- 34、「春山如笑」4字を大胆に横一字二字一字と墨蹟風に書法を超越して書き上げた65歳 S42年の璞社展出品作品である。
- 35、「澄潭に鑑る」3文字縦一行中澄のみ草書で、下は行書でこれも筆を開いた大胆な作。S43年毎日書道展出品作。67歳の作。
- 36、「遺形」は形を遺（わす）る意味に相応しく禅僧の書の如く書法を超越した筆致を感じる。S45年毎日書道展出品作品。
- 37、良寛の五言律詩を横広に七行行書体で非常に大らかな筆致で表現。32の書風と似た書風で、頗る楽な筆さばきで書いている。良寛の書飄逸さを意識しての作かとも思われる。
- 38、「海月澄んで影なし」S45年69歳の作。矢野鐵山氏との墨遊展の出品作品。これも墨蹟風の作。半切たて一行五字書き。

39、鐵山画奇石賛を杜焚川（杜牧）を画の上方に排したが、画に勝るほどの迫力で賛を書いている。

以上60歳代の作品の特徴は、29、31、34、38の如き墨蹟風の作品が、墨痕鮮やかに書法鍛錬しながら更に書法を超越した気迫の書が出て来たことも、この代の奇石作品の特徴とも考えられる。一方23や27、33、39の如き、やゝ細目の線で筆使いが濶達で、筆の先をよく利かしたすばらしい作品でありその上造形の組み合わせが美事な変化となって表現したのは、50歳後半からとも思われる。しかし次の70歳はますます盛んで筆力、気力が正に充実の域に達したすばらしい作品群の数々を観察することになる。

E、70歳代の書（28点）

40、41、43、47、49、50、51、66は少字数で墨蹟風の迫力、気力が漲った作風で見る者を圧倒するほどである。一方多字数の漢詩を屈託なく書き上げた52、53、55、59、63等の作品群は、横額や屏風に自由自在の表現奇石書芸の桜花爛漫の感を味あわせてくれる。更に45、54の楷書作品は筆圧を利かした鋭い奇石風が充分出た作品。42、58、60、は運腕大きく線の細太も巧みに表現

した作品で70歳の書は恐れを知らない明るさと大らかさを感じる作品がほとんどである。更に44の万葉仮名作品は人を寄せつけない厳しく勢のある筆致は実に美事である。

40、「靄然」2字横書き、墨蹟風に書法を超越した70歳 S46年毎日展の作。

41、「不亦楽乎」横扁額4字や、墨蹟風ながら書法のかなった70歳の作。

42、「鳥啼忻然有会」S東方書道院展に縦一行快適に筆を運び、長鋒で筆の開きがほとんどない。

43、「清虚」全紙縦二字。すごいエネルギーを感じる。気力の凝縮が一度に発散する寸前の如き、魂の躍動を感じさせる作である。これも70歳位の作。(写真6)

44、大伴家持の歌「わがやどの いささむらたけ ふくかぜのおとのかそけき このゆるべかも」を万葉仮名で冴えわたった線で切れ味のよい筆致は、痛快そのものである。全紙 $\frac{1}{2}$ 六行にすっきり纏めた心にくい作である。

45、石川丈山の山居即事。S49年73歳璞社展の作。楷書で筆先のよく利いた鋭い奇石調の作。

46、七言二句双幅。毎二行縦書き、行草体で大胆に一气呵成に書き上げたもの。

47、「傾半瓢之票」S50年二十人展。74歳の作。全紙二行五字の作。筆力あり運筆大きい堂々の作。

48、「遊不帰」半切横 $\frac{2}{3}$ に3字。この年代になく静な韻の作。74~6歳頃の作。

49、「寧慙湖上梅」S51年日本の書展出品作。縦5文字柔い毛質をよく開いて重厚な線で表現。

50、「撥雲」S51年75歳の作。小品ながら墨蹟を彷彿させる迫力を覚える。

51、「一声孤鶴破寒煙」S51年日展の作。小画仙紙に7字を二行で表現。意味に相応しい簡素な字形で、それでいて非常に温雅な線質と動きが、一層説得力を出した傑作の一つかと思う。

52、五言絶句「鄰鷄殘夢断、窓雨一燈深、薄冷披衣起 晨鳥已滿林」S52年76歳の読売書展全紙横五行の作。熱気の入る潤達な作。筆圧の利いた重厚な作。

53、杜牧「江南春」を全紙横六行に長鋒羊毛筆で大胆自由奔放に筆を弄した美事な作。しかも正確な筆致空間余白の広がり感に感銘を受ける。(写真7)

54、劉禹錫「陋室銘」を楷書六行で中字ながら筆圧の利いた鋭い筆致の作品である。からし色絹地の作。奇石楷書作品の典型的な作品である。

55、苦王室隅占一奇石自作。「一架の図書 文字の縁。蝸盧平穩 日年の如し、興来って 且つ喚ぶ三杯の酒。微酔茫々 机に隠って眠る。」文字を読んだり書いたりすることはなにかの因縁であろう。家中に事もなく一日が一年のように長い。時には酒を酌み、酔えば机にもたれて眠る。勤めをやめたからこそそのありがたさである。扇面5字2字行に落款を配した作。S53年77歳喜寿個展の作である。小品ながら無駄な線のない作で、奈良転居後の作と思われる。

56、「鳴鳳棲清梧」半切五字行書体一行縦書き。77歳の作。明快、余裕の空間と広がり線の変化を覚える。

57、「幽禽声自楽 流水意長閑」四角三行行書の作。一气呵成に剛毛筆で書いた。77歳の作。

58、「読書得趣是神仙」77歳関展の作。行書縦一行半切作品。空間を広く大胆に取ったり、ある点画を著しく長く表現することによって、普通で考えも及ばない独特の情趣が出ている。

59、七言二句「老鶴踏み翻えす 松頂の雪、乱猿啼き裂く、壠頭の雲」14字横四行に行書を主体に運腕大きく、筆力気力旺盛な作。S53年日展の作。77歳の作。

60、五言二句「彩霞 遠嶺を籠め、銀雪は 高林に咲ず」半切対幅行書作。一字の空間、全白の取り方、線の細太の変化。実の悠大に書き、S 54年璞社書展に出品。弟子達に書芸の楽しみを見せつけるが如き、筆致の妙味が遺憾なく発揮されている。78歳の作で70代の傑作ともいえる。

（写真 8）

61、「銀盃に雪を盛る」半切横 4 字。音無しい変化おさえた作。

62、王漁洋「治春」七絶句を瀟洒に五行で纏めた作。長鋒細筆の柔かい毛質で静かな雰囲気で作られた。S 55年79歳の作。

63、S 55年日本書芸院出品作「道旁の店」全紙二枚、每三行草書中心の作。運腕大きい変化にとんだ縦横自在、潤渴もあり他を寄せつけない美事な筆致。これも当時の傑作の一つと考えられる。

64、陶淵明詩五言二句「望雲慙高鳥、臨水愧游漁」62と通ずる静な韻の作。全紙 $\frac{1}{2}$ 行書三行で比較的平静な筆致である。

65、「遊神」S. 55年79歳の作。63に比すれば動き、運腕をややおさえた静かな韻のある作。筆力は相当ある。

66、「忘機」79歳の作。小品ながら、滲みと渴筆が美事。横二文字草書。書法を超越した心情が吐露されている。

67、「林中不賣薪」79歳縦行書一行 5 字の作。やゝ墨量多く渴筆の少ない作。

以上、70歳代の書について観察してきたが、一つは墨蹟風の少字数、更に多字数の作品は、運腕大きく大胆に且つ自在変化に線質の中に心情を托した余裕の作品、更に冴えわたった楷書作品。仮名作品の鋭い切れ味のよい線質と一貫した筆さばきの美事に尽きる。

F、80歳記念個展作品（22点－79歳の京都・徳島展の作品）

131、「薦壽」絹の柔かさが、気の旺盛さを適当におさえ、よい雰囲気醸し出している。聯落ほどの作品だが、大きい広がりを感じる。

132、陶淵明－桃花源の記－を行草の単体で每八行二曲屏風に纏め上げた作。筆致の老巧さと確かさ一点一画に託された精神の崇高さは、奇石芸術のこれまでの蓄積した技法と人生観を包含する傑作の一つとも思われる。

133、「三日不讀書 語言無味」大画仙 $\frac{1}{2}$ に草書体で三行。奇石の生き方、書道三昧がこの作品から窺うことができる。

134、「浅春」を自作詩に托した比較的軽快な筆致でさらっと書き上げた作。しかし筆力は相当なものがある。

135、志貴皇子の御製歌を大画仙紙 $\frac{1}{2}$ に四行万葉仮名で仕上げた作だが、動きと筆力、筆運びの活躍が美事である。

136、李白－桃李園序を半切 6 曲屏風に每二行行草体で、1 と 2 幅目はやゝ静に書いて漸次運筆が活躍して行き、3 と 4 幅目は自由奔放に書き、5 と 6 幅目はその余韻をうけ最後の行＝落款で平静沈着にすがすがしく纏めたのはすばらしい。（写真13）

137、笠井南邨詩－花前満酌－半切絹目に和雅の筆致で淡白に仕上げた軽妙さは、奇石書芸のもう一つ

の表現かと思われる。酔や人の右払いの払いがスムーズに行っていないのは、書痙症の為である。

138、奇岩自作－歳朝－楷書作品ながら比較的楽に書いているので奇石本領の遒勁で重厚、謹厳実直な作というよりは、比較的楽な筆致の作品である。

139、李白詩「下終南山過斛斯山人宿置酒」70字を4行行間を無視し、筆を押しつけるが如き筆致の表現は迫力そのものである。また珍しい表現である。

140、「聴松涛鳥韻」半切に行書体5字一行に一气呵成の作だが、筆力低背に徹するが如きで、筆が刃のように思えるほどである。

141、張若虛詩－春江花月夜－卷子半切幅3.7m一行5～8字で39行。行草体の作。さほど緊張感はないものの平素の奇石書法の筆致で平淡に出ている。この頃書痙症で右への払いがスムーズに運べないと語っていたこともあり右払いはやはり大胆ではない。しかし無難に奇石書芸があまりの儘表現されている。

142、東坡詩－治春－有名な七言絶句を聯落二行と落款に行草体で書き上げている。やはり左払いは大胆だが、右払いは遠慮気味。渴筆部分の線質には奇石独特の洪さが漂っている。

143、白額天詩－錢唐湖春行－全紙横8行行草体ながら行間と字間が適当にすっきりと明るくしかも一定の筆さばきで歯切れよく書かれた作。

144、進藤虚籟の詩。和紙に小品、やゝ模長草書6行で淡白だが、動きは縦横にあるときは大きく、あるときは小さく、実に楽しい作である。

145、「五風十雨」縦半切に4字。風の左払い十の縦画の大胆さが印象的である。

146、陶淵明詩－五柳先生伝－聯落二曲屏風。每五行で重厚な楷書に奇石書芸の粋を表現した傑作。一点一画に心血も集中した技量の凝縮を感じる傑作の一つである。(写真14)

147、奇石自作。「月下聴泉」全紙 $\frac{1}{2}$ 五行書体主の作。書き出しの墨量の含みによる深さ、中途の濶達な筆の動きさすがである。やはり左払いは思い切りよいが右へはやや、遠慮気味の感がする。

148、李白詩－清平調－三首。中画仙聯落に每三行行書主体の連幅。単体で書いて每三行の流れがスムーズで、尚且つ濶達に動く筆さばきと造形が美事である。

149、奇石詩－題全農梅花図－半切平らな扇面に毎行に3文字と2文字を5回の繰り返し、作品構成もすっきり、線質も含みがある中に明快に表現された傑作の一つである。。

150、東坡詩三邨三絶。筆を大胆に開かないで、やゝ細い目の筆で無理なく心細やかな表現。この手の表現は阿波踊りの男踊りの乱舞を想像できる奇石の一つ表現法であろう。

151、奇石詩－八瀬偶占－七言絶句を単体でやゝ剛毫面相筆で明快に白磁陶板に書いた。

152、進藤虚籟先生詩。七言絶句を単体で明快な五行事。白磁陶板。

154、寒山詩。五言律詩を六行行書単体で力強く書き上げた57歳頃の作品かとも思われる。

以上、131～152までは80歳記念個展として79歳の時に書かれた作品で、奇石書芸の一番充実したときの作品ばかりである。徳島県文化賞受賞。「小坂奇岩作品集」講談社から出版等世に奇石書芸の評価が充分なされたときである。この個展では今まで墨蹟風の重厚で書法を超越した作

品は少なく、真に円熟した老巧な線質と心爽やかな品の良さが感じられる作品が多かった。奇石書芸の格調の高さと人品の良さから進る作品が人をして魅了すると思われる。

G、80歳代の書（31点－米寿個展以前の作）

- 68、「不如学」80歳、横行書3文字。小品34×82cm。
- 69、「神爽」S56年璞社展の作。全紙横二文字。迫力抜群。80歳でこれほどの気力と筆力が出るかと思う程の作。墨量や、少ないそれだけに渴筆から出る力強さが圧倒される。
- 70、「澄神」81歳横二文字の作。S57年読売書展の作。やゝかた目の筆で、本画仙に潤と渴の表現を一気呵成に仕上げたところは美事である。
- 71、「棲遲慰情」S57年81歳の作。正方形に二行4字を気宇雄大に書き上げた作。
- 72、「暢叙幽情」全紙横に二行4字書き。S57年璞社展の作。幽情をのびやかに叙述する「暢叙」の表現の変化が面白く緩の味がよく出ている。
- 73、「気爽」。S58年82歳の作、行書縦二文字ひき締った中に爽さがよく出ている。
- 74、「雨順風調四海寧」半切縦7字一行の作。中の「調」の筆の軽妙さが作品全体の変化を出している。
- 75、「雲中白鶴」82歳の作。羊毛長蜂のやゝ細目でよく動く中「白」字の一画目の大胆な右下へ運んだ筆は実に面白いし効果的である。S58年日本の書展に出品。（写真9）
- 76、「無礙」S59年西日本書壇全貌展出品作。横二文字草書。70の「澄神」と相通じる作。本画仙紙に潤筆のところ深味があり、渴筆は力強さを加味する。
- 77、「清風灑然」S59年関展出品作。意味に相應しく細い線質瀟洒な雰囲気だが動きは大きい。細目の羊毛筆のため線に味がある。
- 78、「魚相忘乎江湖」S59年83歳の作。全紙 $\frac{1}{2}$ に6字二行行書体。墨含んで深さを覚える。
- 79、醉古堂剣掃の一節S59年璞社展の作。半切行書主体の6曲屏風の大作。書き出しの一幅目から運腕大きく大胆に書き上げた動きと切れ味の良い傑作である。
- 80、「蓬蒙善射」S60年84歳の作。全紙 $\frac{1}{2}$ 正方形に行書体2字二行で一息で書き上げ二十人展の作。
- 81、寒山詩 五言絶句を二曲屏風に仕上げた上に直かに書いたため、墨が紙に含まずその上剛毫でしかも筆のおり具合が充分でなかったと見えて、運筆はよいのだが上すべりをした感は免れない。
- 82、「福星開寿域」S60年84歳サンケイ100人展出品作。縦半切5字行草体の作品である。身体と腕がよく動いた作。
- 83、「許由洗耳」S61年雅延会展出品作。全紙 $\frac{1}{2}$ 4字を各行2字ずつ行草を最も簡素化し肉太の作。運腕大きく空間の取り方が美事である。
- 84、「持法有恒」S61年読売書法展出品作。全紙 $\frac{1}{2}$ に4字各行二字。書出し小さく残り3文字は、腕大きく回転させるがごとき広い空間を取った美事な作。法は旧字体。この種では傑作の一つかと思う。（写真10）
- 85、「澗水湛如藍」S60～61年、84～85歳の作。平成2年日展出品。腰痛のため動きは余りない。

縦半分五文字行草作。

- 86、「魂乃開発」 S 61～62歳の作か。読売書法展 H 2 年に出品。横四文字行書の作。今までの重厚と迫力はない。
- 87、空海一五言二句－「鸞風翔碧落 龍螭遊蒼海」 S 62年86歳の書。全紙横行書一行 3 字毫剛のため線がやゝかたい。渴筆の筆の開きがやゝ乏しいが力強さはある。
- 88、「呦々鹿鳴」 S 62年86歳の作。小品ながら筆の弾力を使った丸味のある線質。明るくゴムマリが弾くようである。
- 89、「和光同塵」 S 62年86歳の作。読売書法展出品作。全紙 $\frac{1}{2}$ 4 字を各行 2 字。和と塵を旧字体や異体字により行書体で表現、単純な文字をより複雑化して変化をもたせた作。
- 90、「笑而不謔」 S 63年87歳の作。半切横四文字。笑に口扁を付けたり、答を異体文字を使って変化と格調を出す工夫がなされている。
- 91、「蜂房不容鵲」 S 63年87歳の作。全紙 $\frac{1}{2}$ 一行 3 字ずつ二行行書体で、顔真卿の祭姪稿を彷彿させる書風。線に丸味と温雅さがある。
- 92、「鶴唳数声煙靄中」 S 63年86歳の作。現代書家50人展出展作品。全紙 $\frac{1}{2}$ に一行 3 字ずつ、渴筆部分やゝ疲せているが、動きがあり堂々としている。
- 93、「珠玉在側 覺吾形穢」 S 63年日本書芸院展出品作。半切 $\frac{1}{2}$ 縦二行行草の作。筆かたくその上、筆のおりが充分でないため線がやゝ単調すぎた。
- 94、「虚」 S 63年、87歳の作。二十人展出品作。小品ながら筆力迫力充分の作。
- 95、「鹿鳴」 S 63年87歳の作。二十人展出品作。半切 $\frac{1}{2}$ 弱横 2 文字行書作。運腕よく、渴筆もよい。やゝ肉太でソフトな線、丸味の造形が、ほゝえましい表現になっている。
- 96、「鈍鳥栖廬」 S 63年87歳の作。半切横四文字行書体。線質造形ともに丸味があり、筆の弾みを使った巧みな表現である。
- 97、蘇東坡の偈、S 63年、87歳の作。腰痛で身体が以前に比して余り動いてないが、以前体得した筆致がまた老巧な線質が作品としての調和と格調を保っている。
- 98、「拳杯邀清光」半切縦 5 文字、S 63年日本の書展出品作。行書単体で静かな韻の作。やは動きは70代に比して小さくなっている。

H、米寿個展の書とその他（32点）

- 99、蘭亭序全文を大画仙人聯落に毎四行で行草の単体で表現、行の流れなど意識せず、一字一字精魂込めた作。今までの習練が自然の流れを作る。動きも呼吸もさほど変らない。それでいて観る者に深い味わいを感じさせる。つまりは奇石の人格が作品に投影されて魅力となっているのだと思う。
- 100、奇石自作。「今の是れ 昨の非心緒寛なり、初めて知る白屋身を托して安きを。詩を敲き字を写し、何ぞ多重なる。一日の忘機は一日歎。」心情を吐露され、簡素な表現は身体の動きが充分でないからか。
- 101、奇石自作。小品に草書で書き。前の作品と同じ書風でやはり動きはやゝ小さい。（写真11）

- 102、酔剣堂古掃の一節。「一輪の明日・・・」を直径34cmの小円に五行21字を纏めた草書主体の作。小品ながら相当の筆力を覚えた。
- 103、奇石自作－元日即事－半切より少し幅の狭い双幅。やはり身体の都合で、縦書きはどうしても動きが小さい。しかし老巧な筆致が確実な表現となっている。しかし気力と筆意は相当有る。
- 104、「徳不孤必有隣」剛毫の細い筆で筆勢を出しているが、やゝスケールは小さい。線には味わいがある。
- 105、木保修の歌「さわがしき・・・」小筆を筆一杯に開いた太い線の表現。渴筆の線が奇石書芸の渋い味となって醸し出されている。サンケイ百人展出品の作。
- 106、山辺赤人の歌、サンケイ100人展出品作。万葉仮名のみ駆使した大胆な筆致が印象的。小品だから、「礼、都、来、－」等大胆な筆致が可能だったと思われる。
- 107、斎藤茂吉の歌「最上川・・・」草書と変体仮名を混えた優しい仮名的表現で纏めている。半切 $\frac{2}{3}$ の縦長の作品なのでやはり動きは小さくなっている。
- 108、奇石自作。「遊箕面」二首、随円形のたてに右側の作品は五行で、向って左側の作品は六行で五言律をそれぞれ草書体で作品にしている。筆力はある、気力もあるが、やはり動きは小さい。
- 109、奇石自作四首「黙語堂雜記四首」を半切横に各詩四行で表現。最後の落款二行でよくまとめている。
- 110、山辺赤人の歌。一行目やゝ扁と旁を広く開いた造形、二行目は締りすぎた感があり、線の開きの少ない作品である。
- 111、平福百穂の歌、丸味のある線の調和体で仮名の散らし書きを取り入れた温かい作品である。
(写真111)
- 112、寒山詩。五言二句を全紙 $\frac{1}{2}$ にやゝ潤筆で力味のない作。
- 113、奇石自作－蘭亭曲水宴－半切縦三行に、身体の動きの小さくなっているのに、大胆に左払いや縦画を広く大きく長く表現しているのがこの時期では珍しい。
- 114、「書魂」米寿個展の象徴的なもので奇石ならではの表現かと思う。
- 115、「鑑澄潭」半切横三文字作品。大きな動きでないが、無駄のない簡素さがすごい。余分なものを全て省いた澄みきった鏡の如き感じがする。
- 116、「日出皎兮」半切縦 $\frac{3}{4}$ に4字肉太で大らかに書いた作。
- 117、「南山寿」半切縦 $\frac{2}{3}$ 3文字やゝ細い線で書いた作。
- 118、「晏如」半切 $\frac{1}{2}$ 縦に2文字相当太い線で墨蹟を想起するほどの筆力と迫力である。
- 119、「寿」全紙 $\frac{1}{2}$ に一字行書で書いた上部に重心をおいた作。落款印のみ。
- 120、劉球詩、聯落 $\frac{1}{2}$ に五言絶句を三行に草書で書いた作。痛い腰と身体の縮みを弾き飛ばす程の動きと気力が感じられる。
- 121、奇石自作の詩、「遊龍田」小品四行に草書で表現。
- 122、「朝日日出東方」半切縦一行行書で五字。心の欲するまゝの自然の表現。
- 123、奇石自作詩。－高雄晚帰－身体の動きは小さく細やかだが瀟洒で味のある作品である。半切縦二行に七言律詩の表現。

- 124、「識法者懼」半切横に四字。同じ太さ、細部にこだわらない大らかさがよい。
- 125、「開花始錦」半切横四文字行書作品。小細工のない素朴な表現「脛」の字も面白い表現である。
- 126、奇石自作－鐵仙蓮－ほぼ半切大に鐵仙蓮の三文字を大きくを大きく残りの文字を六行に安排して纏めたのが楽しくまた変化に富む。
- 127、奇石詩「遊灘江」の七言絶句を縦長扇面に四行にまとめた作。太さもあり適度の動きも感じられる味深い作である。
- 128、奇石自伝－佐古清水寺偶占半切 $\frac{4}{5}$ に五言絶句を二行に同じ太さながら筆力のある作品である。
- 129、「天真爛漫」半切横4字行書。この書米寿個展の時の作品と思われるが、余分なものを省いた簡素な美である。H4年二十人展出品作。
- 130、清姫莊－即事－五言絶句を筆力のある行書で四行に纏めた作。
- 以上米寿個展の作品とその他の作品の傾向は、12点も自作の詩を情懷を込め様々な形式作品に仕上げること。この時期の大家で自作詩を作品に出来る人は希少価値といってもよい。
- 書作品への表現も70歳代及び80の初め頃までは多彩な表現だったが、さすが米寿個展の作品の多くは、線質の細やかな変化や味わいは少なく、余分なものをすべて除去した単純で簡素化された造形と含みのある素朴な線質へと移行していることが観察できる。
- 更に少字数の作品の題材は、奇石の人間性に立脚した精神性の高い、また奇石が理想として来た語句、米寿記念に相応しい語句はすごい迫力で願いを表現している。
- 和歌の表現は、漢字と仮名を巧みに調和させ、書法上自然な筆法で味わい深い連綿で作品化しているところが、奇石の技巧と格調の高さであり、習練の深さのなせるところといえる。

5、まとめ

奇石書芸の臨書をあくことなく学習し続け、基礎固めすることが第一であった。奇石は作品構成や字形を主に考える技巧中心の考え方には批判的で、技よりも心構えが必要で、造形美よりも線の美を求めてやまなかったのである。しかしながら奇石自身が、題材に応じて千差万別であったのも不思議なぐらいである。奇石は正統派の書道を学び、深い漢字の素養のもとに詩書を作って楽しむ文人趣味の伝統を継承したといえる。更に漢籍にとどまらず多くの仏典をも渉獵した奇石の広大な学殖を反映している。また書の題材も常に清新で適切であったことも見逃せない。奇石は真摯な態度で研究につとめ、いつも崇高な精神を求めてやまなかったところにその偉大さがある。

奇石が若い頃、身体が弱かったがそれも克服し、健康に留意しながら健康な身体から健全な精神が養われることも身をもって体験したと思われる。そしてその崇高な精神によって真の優れた芸術が生まれ得ることを奇石自身実践して来たともいえる。

6、おわりに

今回寄贈の奇石書芸が徳島の文化財として、中林梧竹の作品とともに、後学のためのよき作品資料として、県民或は愛好者に充分鑑賞され、研究されることが何より大事である。その意味からもより早期の県立の記念館或いは書道美術館の実現が望まれる。

この稿が今後の研究者の一助になれば幸いある。

7、写真資料

3. 鄭集詩（写真1）

林疎多舊碑
碑在石山煙古
壁爐熏畫秋
雨晴弦竹翠
窺遠郭
窺上石穴
泉西長沙
房在碑
初更錄
主考金口

10. 陸湘客之語（写真2）

蒼海日新
城霞嶺
雪正
峽雲洞
通月
起岳
煙滿
雨
庭波
漾
卷山
溪
布
今
宇
宙
奇
觀
絃
音
齋
吟
少
長
清
靡
結
費
久
傳
文
馬
逸
史
薛
清
片
之
雲
中
而
並
經
湘
水
賦
屈
子
誰
能
壯
今
他
卷
五
我
山
心
思
外
陸
湘
客
語
也
都
金
口
傳
主
考
金
口
外
陸
湘
客
語
也
都
金
口
傳
主
考
金
口

15. 芭蕉—贈洒堂（写真3）

湖の磯と直ぐう田
一正まらん多うしう
おとけしうもあうし
つゝとりし
秋ははらうれ
かきと冬とまじ
きりあも

18. 寿無疆（写真4）

壽時無疆

奇石さん



21. 奇石自作詩—題金農梅花図（写真5）

冬心妙筆寫
心逸神忘何仙
管犯歌多時樂
其意何系半日
生花一枝

龍金農梅也
國奇石作

43 清虚 70岁 (写真6)

清虚

清虚

53 杜牧诗——江南春 76岁 (写真7)

千里莺啼绿映红
水村山郭酒旗风
南朝四百八十寺
多少楼台烟雨中

杜牧诗江南春

60
五言二句
78歳（写真8）



75
雲中白鶴
82歳（写真10）



111 平福百穂の歌（写真12）

（金剛）の二つをよき
 まゝにふりまわると
 なかめつることも松のう
 五つ

84 持法有恒 85歳（写真10）

持法有恒
 有恒

101 奇石自作 米寿個展（写真11）

米下は同福まはに
 風月を力にまはに
 ちかき日我をまに

136 李白詩「桃李園序」（写真13）

夫天地萬物之造，始於陰陽。其
 有代之以過，而後生者，皆為
 我輩中人。秉性自然，出於
 自然，陽春台哉！煙景不塊
 假我文章，會桃李之芳園，
 賞之。倘幸多輝，手後者
 以之。惠然，必引為助。然
 康平四年春，幸也。為桃李園
 序。予近以燕，為之。陽而
 醉，不亦。付化，仲能。悅。必
 詩。成。則。依。金。興。德。義。
 王。不。可。不。也。地。手。園。序。奇。石。書。

146 陶淵明「五柳先生傳」（写真14）

先生不知何許人也，亦不詳其姓字。宅邊有五柳
 樹，因以為號焉。閑靜少言，不慕榮利。好讀書，不求
 甚解，每有會意，便欣然忘食。性嗜酒，家貧不能常
 得。親舊知其如此，或置酒而招之。造飲輒盡，期在
 必醉。既醉而退，曾不吝情。去留環堵蕭然，不蔽風
 日。短褐穿結，簞食屢空。晏如也。常著文章自娛，
 頗示已志。忘懷得失，以之自終。贊曰：黔婁有言不
 戚戚於貧賤，不汲汲於富貴。極其言，茲若人之儔。
 手酣解賦詩以樂其志。無懷氏之民，與葛天氏之
 民，與陶淵明五柳先生傳。奇石書。已未春。

8、参考文献

月刊誌「書源」1号～350号

「小坂奇石の生涯」

「和雅の書」

「黙語堂雑記」

「黙語堂雑記」

「小坂奇石書芸集成」

「性霊集語録・書の手本」乾・坤

「小坂奇石臨書集成」

「鑑賞作品の作り方」

「璞社展作品集」第1回～37回展